

九条の輝きを世界へ

医療九条の会・北海道 会報 第4号

発行：2009年1月 発行責任者：猫塚 義夫

札幌市北区北14西3 1-12 TEL(011)758-4585 FAX(011)716-3927 9jyo@dominiren.gr.jp

迎春



2008年をふりかえって……

- 写真 右上：世界平和アピール7人委員会とのジョイント講演会(10/5)
右下：結成2周年記念講演会(6/28)
左上：第7回憲法セミナー(4/24)
左下：街角憲法リレートーク(5/3)

従軍看護婦の証言

山崎 幸さん

1926年、朝鮮・羅南の生まれ。長岡日赤病院から旧陸軍看護婦として中国大陸へわたりました。終戦後もそのまま大陸に残って八路軍（中国人民解放軍）と行動を共にした希有な経験を持っています。

帰国後1959年に北海道勤医協へ参加。勤医協札幌病院、同中央病院総婦長などを歴任。現在は日中友好協会の一員として元気に活動されています。

（当別町在住）

当日の講演（要旨）をご紹介します。



私が生まれたのは大正15年、小学校に入ったのは昭和8年です。教科書やいろいろな制度が戦争に向けて変わっていった時代でした。父親は早くに亡くしましたが、助産婦をしていた母親から「手に職をつけるように」と言われ、あまり気がすすみませんでした。看護婦になりました。高等科を卒業して産婆学校に行き、看護婦の免許を取りました。

親戚の伝で新潟にある日赤病院に勤めました。それから1年半くらい経つと戦争が本格的になり、満洲に出兵する人が多くなりました。村の境で兵隊さんを見送ったのを今も鮮明に覚えています。私は「何かあったらすぐ戻れるから」と言われて大連の近くにある金州の陸軍病院に行きました。軍隊はどこを向いても男の人ばかりで、女の人ほとんど居ませんでした。軍隊というところがよく分かっていなかった当時の私は、怖くて朝から晩までビクビクしていました。兵長さんに「どうしていいか分からない」と相談すると、軍隊では「入ります」「帰ります」「はい」の三つだけ喋っていれば良いと言われて「なんて軍隊の言葉というのは簡単なんだろう」と安心しました。

私が配属になった886部隊の後方病院には、結核や伝染病になった兵隊さんが多くいました。ある兵隊さんが重症の結核で入院してきて、まもなく危篤状態になりました。電報を送って日本から家族を呼ぶことになり、家族が到着するまでになんとか生かしておこうと必死で看病しました。しかし残念ながら家族が到着する前の日に亡くなってしまいました。兵隊さんの父と母が、持ってきた飴玉やおはぎを亡骸の口に当てているのを見て、はじめて私は涙をボロボロとこぼしてしまいました。その兵隊さんは日本に居たときから重い結核でしたが、兵役検査の時にたまたま調子が良くて甲種ということにされてしまったのです。検査でちゃんと調べればわかった筈なのに「いったい日本はどうしちゃったんだろう」と、私はそのときに思いました。

私が当直の日にかぎって人が亡くなるが多かったものですから、たくさんの遺体処理をしました。亡くなった人の荷物を整理していると、家族の写真や「御国の為に戦ったのだから俺が死んでも悲しまずに、みんなで仲良く暮らしてほしい」と書かれたお手紙などが出てきた

りして、それを見る度に泣いていました。

一年半後、戦況が悪化してチチハルにある飛行隊の司令部に行きました。着いたとき、その軍医さんから「いつ何があるか分からないから、覚悟しなさい」と言われました。私は何がおころうとしているのか、その時はわかりませんでした。ある日「軍人の家族を連れて日本に帰れ」と上官から命令を受け、飛行機に乗るためにハルピンに向かいました。

ハルピンへ向かう途中、大慶にいたとき日本が敗戦を迎えました。すぐにロシアの兵隊が入ってきて武装解除をすると、今まで大変な目にあった中国人の農民の一部が略奪しに来ました。鳶口のようなもので荷物をひっかけて取っていったり、子どもが欲しい人は背負った子供に鳶口をひっかけ、母親ごと連れていきました。夜になると今度はロシア人たちが鉄砲を威嚇射撃しながらやって来て女性たちを襲いました。食糧も尽きてしまい10人くらい居た子どもたちはみな死にました。どこにも埋める場所がないので草を被せたり、自分の着ていたものを着せたりして木の根元に置きました。私はなんとかハルピンに着いたのですが、飛行司令部はもぬけの殻だったので、市内にある難民収容所のようなところに逃げたのです。

収容所には医薬品がなく、お医者さんも居なかった。私はそこで死んでいるかどうかの確認ぐらいしかできませんでした。「目を開けたまま動かないけど診てくれないかしら」「口に蛆虫がたかっているけど自分で掃わないから死んでいるかも」と言われて死亡確認しているうちに、私はみんなから看護婦だと認識されるようになりました。

収容所に食べるものがなくて、私が瀕死になっている状態でいたときのことです。どこからか「看護婦さんは居ませんか」と聞こえてきて、私がとっさに「はい」と返事をすると、軍医さんが来て「衣食住と命を保証するから私たちの

病院に来て手伝ってくれ」と言うのです。私は「命の保証」という言葉につられて、ついて行きました。その人は八路軍のワンさんという軍医でした。当時、中国では国共内戦が行われ、国民党軍と共産党軍が争っていました。八路軍は共産軍でしたが、私はそんなこと知る由もありませんでした。内戦ですので敵と味方の違いは服だけです。服だけ着替えてスパイをする人が多かったものですから、偉い人たちがたくさん殺されて、とても混乱していたようです。「命の保証」なんて本当は無かったのですが、ワンさんに誘われて八路軍で働くことができたので、今の自分があるのだと思います。

私は八路軍の病院に行き瀕死の状態から回復すると、すぐに手術場に配属されました。軍医二人しかいなかったのに昼も夜もぶっ通しで手術しました。手術中に立ったまま居眠りしてしまうような状態です。私が一番はじめに手助けた手術は破傷風で、二番目はガス壊疽でした。「ガス壊疽」という病名は知っていても、どんな症状なのか診たことがありませんでした。傷は小さいけれども色が変わっていました。先生が「患部を押してみろ」というので、傷の横のあたりを指で押してみると、ブズブズブズという気泡のような音が指に伝わってきて、これがガス壊疽なのかと思いました。その患者さんは翌日、亡くなりました。亡くなった人は外に放って置きます。するとキツネか何か食べてくれるという訳です。天然痘にかかった患者は熱が下がると同時に白い丘疹が全身を覆い、全身が真っ白になるんです。治療法はボロシートで首から下を包んで、1週間から10日間そのままにしておき、湧いてきた蛆はホウキで掃いて落とします。すると何人かは亡くなりますが、何人かは助かります。

手術をしている先生はトイレに行く時間がないので、コッヘルでズボンのチャックを開けて手術場の隅で用を足していました。輸血すれば助かると先生が判断したときは輸血します。O型の血液が必要なときは私が呼ばれ、有無を言

わさずに縫い針10本くらいのぶっとい針を打たれ、心臓が止まるのではと心配になるくらいの量を取られました。今でも輸血した痕が勲章のように残っています。血を抜かれた日には、ご褒美に卵が夕食に出てくるのでそれは楽しみでもありましたが、二日ぐらいしたらまた呼ばれて輸血を求められます。「この前に抜かれたばかりだ」と言う、「死なないから大丈夫だ」と言われてまた、ツツツと血を抜かれました。このような野戦病院での体験をしたわけですが、あのとき「命の保証する」と言って八路軍に連れていってくれたワン先生は、私の命の恩人だと思っています。



従軍看護婦の終末は、辛くて誰も語ろうとしません。

今から3年程前、長野県で元従軍看護婦の集まりがあり、参加してきました。そこで同じ部屋になった看護婦さんが泣きながら語りだしました。

終戦直前には、看護婦が6か月間の研修だけで育成され、すぐ戦場に送られました。彼女もその一人で、陸軍病院に配属されます。すぐに戦争が終わり、彼女と数人の看護師が動けなくなった重傷患者とともに病院に残されました。彼女は婦長さんに注射するよう言われますが、研修直後だったので「できません」と言う、「こうやって注射するんだ」と婦長さんに教えられます。しかし、注射された患者さんはすぐに苦しみ、死んでしまいました。彼女はそれが毒であることを知りました。

病棟には30人くらいの動けなくなった患者が居て、次々に運ばれてきます。彼女は泣く泣く動けなくなった患者さんに注射を打ちました。最初の数人は可哀想だと思いましたが、天皇の命令ということで、やがて普通の注射を打つ感覚で毒を注入していくようになったとのことでした。

「私はあのとき殺人を犯してしまった。どこに行っても誰に謝ればいいのか」と、彼女は泣き崩れました。今まで家族にも言えず、今日はじめて私たちに語ってくれた辛い経験です。私たち部屋の仲間は「悪いのはあなたではなく戦争だ」と彼女に言って聞かせました。

もうひとりの看護婦も「喉が乾いたらこれを飲みなさい」と言って、助からない重傷の患者さんに青酸カリを入れた牛乳を渡していたそうです。事情を悟った兵士はその牛乳を一気に飲み干し、死んでいきました。患者が残っている病院に外から鍵をかけて火を放ち、丸ごと燃やしたのを見た看護婦もいました。

「戦争の悲惨な経験をするのは、私たちだけでもう十分だ」と、同じ部屋の4人は目を真っ赤に泣き腫らして朝を迎えました。

私たちは懺悔の気持ちを話し、平和がどれほど大切かを確認し合いました。

そしてこれからの余生を平和活動のために尽くしていくことに決めたのです。家族からはよく「年齢も考えないで何処にでも飛んで行く。もう少し自分の体を気遣って」と注意されることがあります。私は日中友好協会の会長をしていますけれども、これは仕事としてやるのではなく、趣味としてやっつけていこうと思います。それなら誰からも文句を言われることなく趣味に没頭することができると思います。

あとどのぐらい生きていけるかわかりませんが、うんと長生きして余生を恩返しに使いたいと思います。

《参加者の感想から》

当日は、会場をあふれるほどの参加がありました（80人以上）。中でも看護学生・医学生・若い看護師が20人ほど参加していて、その姿が大変目立ちました。感想を寄せたいいただきましたので、ご紹介します。

★実際に戦争の話を初めて聞いてみて、まず戦争って本当にあったんだ、戦争って本当にすごく、二度とやってはならないことだという感想を持ちました。看護学生として、人として平和を願いながら、これから勉強をがんばっていきたいと思います。

☆部隊の撤退の時に重症患者を見捨ててしまった、そしてそのことが今でも心に残り、締めつけているというお話しがとても印象に残りました。戦争は悲劇を生み、その後も心を苦しめるということあらためて考えさせられました。

★極限の状態で傷ついた軍人を看護する気持ちはどんなだったのだろうと考えると胸が苦しくなりました。自分ならその場から逃げ出しているだろうと思います。看護師をめざす立場として、平和な世の中を大事にして生きていきたい

と思います。

★戦争の恐ろしさを知らない私たちは、今はとても幸せなのだなあと思いました。しかし二度と戦争を起こさないためにも、昔のことを知り、考え、平和についてもっと深く考えて、私にできることを探し、山崎さんのように行動していきたいと思いました。

現役看護師の方からも感想をいただきました。

■人生の中で最も語りづらい悲惨な過去の歴史をあえて私たちに語ってくださったことに深く敬意を払いたいです。微力ではありますが私も平和を守るためにできることをしていく決意をさらに強くもつことができました。

□戦争では、看護であっても患者さんを死に至らしめる行為が命令によって行われる。その苦しみがわかり、二度とそんなことがないように看護を守って平和のためにがんばりたい。

■生々しい真実を語る山崎さんの人生に深い感銘を受けました。この時代を生き抜いて、語り、闘い続ける山崎さんに学び、平和を求めてコツコツと努力していきたいと強く感じた講演でした。



講演後、看護学生に囲まれて

加藤 周一先生の逝去を悼む

共同代表 黒川 一郎

2008年12月5日午後、私どもの敬愛する加藤周一先生は89年の生涯を静かに閉じられました。先生の死は大きな哀しみであります。

特に私ども「医療九条の会・北海道」を立ち上げたものにとってその思いは一入であります。

かねてこの会の準備を進めてきた我々は加藤周一さんをお招きした講演会を成功させ、同時に会を正式に発足させようとするにありました。2006年7月22日、前夜の北大に於ける講演会に続いて札幌市共済ホールで行われた加藤周一講演会を契機に会が発足したのであります。

加藤さんの多岐にわたる業績は誰しも知るところですが、私は1940年代末の当時北大予科にあった国文学研究会の顧問風巻次郎先生（1902年生まれ）の発言を思い出します。この年の1月に行われた衆議院選挙で日本共産党が大巾に議席を伸ばしました。学内でもそれが引き金となり、マルキシズムと自分という課題が結構問題になったものでありました。風巻先生が”僕は僕なりにマルキシズムというものに考えがあります”と述べつつ、”しかし、これとは自由に加藤周一君とか中村真一郎君といった若手の諸君は実にみるところを見、つくべきところについていますね”。先生の発言が幼い私の心に刻みつけられました。なにごととも恐れず自分の頭で考え、書き、討論し、行動する・・・そういった姿勢がひとつ風巻先生のように戦時中の暗い軍国主義の重圧にひしがれた心にまぶしく映ったのかもしれない。

加藤さんの表した評論・小説・政治的発言などはその後折に触れ読みあさったものですが、加藤さんご本人にお会いしたのは、いまから10年近く前、氏が80代前半のころ藤女子大学の講堂の講演会でありました。加藤氏のお名前をお聞きしてから既に60年近い年月が過ぎ、老齢の域に達した加藤さんは杖をつきながら、やや猫背で低い声でしたが論旨は明快に話しをすすめられました。印象に残ったのは、話の最後に”私は戦時中不本意に死をとげた友人を思えば平和に傾く。平和を擁護したいという考えにどうしても傾く・・・”と毅然として言われた事でした。また聴衆が十分に講堂を充たし、わたしが医師会で顔なじみの先生の顔を決して少なくない数で認めたこと、北大、札幌大の教授、助教授がご夫妻で参加されておられたことなど、ある感慨に打たれました。多年加藤さんの書物に親しんできた人のみならず、年齢のはなれた若い層にもファンが多いのだなあと改めて感じたものでした。

数年後の2004年、加藤さんは、井上ひさし、鶴見俊輔、澤地久枝、奥平康弘、小田 実、大江健三郎、三木睦子といった方々と憲法九条を守る会の呼びかけ人として立ち上がられ、志をおなじくする人々にリベラルなスタイルでそれぞれの相応しいやりかたで九条を守る会の設立をよびかけられました。その精神的支柱として”知の巨人”といわれた加藤周一さんはだれにとっても最も意義のある存在であったと思います。

我が北海道でも設立の会に加藤さんを是非にと、猫塚幹事長が実に精力的に説得を行い、二年がかりで札幌に2006年7月御招請することができました。前日の7月21日北大クラーク会館での講演会の司会は宮本太郎教授でしたが、私が”宮本教授は加藤先生が若いとき座談された宮本顕治さん

のご子息ですよ”と申し上げると、”札幌では色々な人に会えますね”と和やかな雰囲気でした。

会は600人の参加者によって盛り上がりました。二日間お供させて頂いた私にも大きな経験でした。往復には二人の医師（整形外科・麻酔科医）が終始付き添い、無事ご自宅までお送りして、加藤さんから握手を求められ、積日の苦勞がいつ頃にふっとんでしまった！と聞かされました。

九条を廃棄・改変すべしとする動きと九条擁護の動きは鏝迫り合いで今日まで来たと思います。2001年当初から世論調査で「改憲」が「護憲」を上回り、教育基本法改悪・沖縄戦における自決強要裁判など攻め込まれたこともありました。2004年にもし九条の会が発進しなかったとしたら、今のような情勢とは異なる展開があったのではないのでしょうか？もし加藤周一なかりせば・・・と考えると、思い半ばに過ぎるものがあります。

氏の冥福を心から祈り、その志をついで、一人一人ささやかでも努力しようではありませんか。大きな運動も、その芯は小さな個人ひとりひとりの心と行動が、憲法九条をいかすか殺すかを定めるわけであります。

加藤さんの最後の発言と思われるものを引用し、具体的に九条の会にかけた思いを偲びたいと思います。

私は経済の専門家でありませんので、経済のことは深く入りませんが、とにかくそれは考えなくてはならない違う点です。戦前は日本経済の規模が小さかった。失業者を救う唯一の方法は戦争だった、唯一でなくとも、大きな方法でした。でも、今は違います。戦争に頼らなくてはならないことは全くありません。

状況は昔と今は違うから、あきらめずにならば戦争を防ぐことはできるかもしれない。この国の中では大衆の意見、意思表示がまだ無意味ではない。たとえば私は自分のやっていることを宣伝いたしますと、「九条の会」は九条を守ろうと呼びかけている、そしていまそういうことは可能です。1930年代の終わりに戦争が近づいてきたとき、「九条の会」はなかった。何もなかった。「九条の会」の組織は全国に7000を超えました。「九条の会」は無意味などころかだんだん強くなる傾向です。いまでも上り坂です。だから、「九条の会」をバックアップしてください。そうすれば戦争から遠ざかる。で、我々が負ければ、戦争は近づく一当然の話ですが。

（『加藤周一は語る、聞き手：小森陽一』p.50より）



2006年7月22日
医療九条の会・北海道
結成記念講演会にて
（札幌市・共済ホール）

【寄稿】

田母神問題を考える

黒川 一郎

(札幌医大名誉教授)



08年10月31日に航空幕僚長を更迭された田母神俊雄氏。11月3日に「定年」退職し、約6000万円の退職金を満額受け取り、その後も著作・マスコミを通じて、「言いたい放題」状況が続いています。黒川一郎先生から寄せられた論文をご紹介します。

田母神空軍幕僚長が政府見解と異なる発言・論文を公開したとして更迭となった。素早い対応であった

田母神氏の行動はあまりにも開けっぴろげで、単純な論理で若い者を拐かしていると論断するのはたやすいが、世界第三位の軍事力を背景に、巨大な暴力装置になりかねない、空自のトップとしての発言と周到に用意された、論文発表をめぐる動きを見て3つの点から検討が必要と考えた。

I：彼が旧日本国の侵略絶無説の理論的根拠とその滑稽さをえぐること

児玉健次さん(元衆院議院)の資料：08-12-17 革新懇忘年会

・田母神俊雄：1971年防衛大学卒 2007年3月 航空幕僚長(専門部署は高射砲部隊。この航空幕僚長の職は代々パイロットであるのが通例であった。) 当時安倍首相、久間防衛相、守屋防衛次官であった。

・麻生総理発言；現役の幕僚長でありながら発言は不適切。それに尽きる(10・31深夜：発言の是非は問わない：)

1. 「大東亜戦争」は自存自衛、アジア諸国の開放のため、侵略国家とは「濡れ衣」である。

①”論文”批判の基本的立脚点

国連憲章前文および53条(敵国条項：三度目の

侵略戦争を許さない。)日本国憲法 前文. 9条. 99条. 及び自衛隊法 53条：日本国憲法日本国法令の遵守

②侵略の定義に関する決議(74.12.4 国連総会) 決議されたのは74年それ以後の侵略であるから国連決議に違反してはいない。侵略とは他国家の主権・領土・政治的独立への武力行使(1条) 侵略の結果としての領土取得・特殊権益は、合法的なものとして承認されてはならない。(5条) cf ハーグ陸戦条約(1899年)から戦争の違法化への歴史的前進。

1919.6.28 国際連盟規約一条約国は戦争に訴えざるの義務を承諾し・・・

1928.8.27 不戦条約一国家の政策の手段としての戦争を放棄すること(1条)

(クライセビッツ戦争とは別の手段をもってする政治である：を否認

2. 「憲法九條を守り活かす」国民世論の前進、名古屋高裁への危機感

一日米軍事同盟の全地球的規模への拡大、集団的自衛権行使の加速度がねらい

平和的な生存権を裁判所でも認める

3. 自衛隊最高幹部の言動は、自衛隊という実力組織を特定の方向に動かす一統幕学校(学生は選ばれた一佐)に「歴史観・国家観講義」を行う・400人規模

cf 1929.10.24. 世界規模の、失業と貧困

31.9.18.柳条湖事件 石原謙二・板垣征四郎

32.5.15.犬養首相を襲撃

33.1.30.ヒトラー首相に任命

34.10.1.陸軍パンフレット「たたかひは創造の父・文化の夢」

4.「過去に目を閉ざすものは、結局の所現在にも盲目となります。85.5.8」

(ドイツ連邦議会 ヴァイスゼッカー大統領)
総選挙一憲法9条、25条、を守り活かし、海外派兵恒久法をゆるさない。

消費税増税・雇止め＝カジノ経済破綻のツケを国民に回すな

Ⅱ：その政治的動きが日々国会の場で暴露し、その背景をさぐること

参議院井上さとし議員のブログから

11.1.：田母神初質問：回答：日本が侵略国家というのはあたらぬ

11.4.：政府田母神任命責任を回避せんとして大童な行動。主張をくりかえし、問題なしとする。「再発防止」というが絵に描いた餅。

11.5.：ペシャワルの井戸掘で有名な中村 哲さんの招請について。切々たる答えあり。

11.6. 田母神氏の招致決定午後質疑：問題点を防衛相に訊ねたら「政府見解と異なる認識、憲法との関係でも不適切」ところが「憲法99条に定められた憲法遵守義務に違反しないか」との質問に「そのことは頭になかった」「田母神氏の任命責任は当時は問題なかった。幹部教育の場での田母神の憲法論議は憲法の本質に反する」

11.7.防衛省レクチャー・アパ主催の懸賞論文の応募は大半は小松基地の勤務員である。

11.8.：田母神氏の参考人招致決定・自衛隊の根幹にかかわることである。こんな自衛隊教育をしていいのか？

11.10.：田母神質問そなえて準備

11.11.：田母神参考人出席：①田母神アパグループとの関係を聞く。インターネットがパンク状態である。②田母神：①私は悪いことをしていない ②私の書いたことは間違いない③言論の自由

である一と居直る④自衛隊員の言論の自由の問題だ。vs：井上：強大な軍事力を背景とした人物が権限を使ってこのような教育を行うのは問題だ。さらに彼は権限をもって「歴史観・国家観」なる講座を新設し、そのなかで太平洋戦争が侵略戦争であることを否定し・憲法否定を目的とする講義が行われたことを暴露した。幹部教育の資料の全面提出を求める。海外派兵の進展と一体となり、自衛隊幹部で教育や講話を通じて侵略戦争がなかったかのような（否定する）考えが広がるようなことが明るみに出た。

11.13.外交防衛委員会：田母神氏の講義を400人規模の幹部が受講している。教授名簿が黒塗りででたことに民主党の委員長激怒。防衛大臣「プライバシーを考えて黒塗りした」と答弁。二つの新聞社・ラジオ・TVの出演要請しきりなり。

11.14.：昨夜のニュースから今朝の朝ズバ・ワシントンポスト・英字紙ジャパントゥタイムスなど黒塗り批判旺盛なり。

11.15.：防衛省本部が自衛隊の航空幕僚監部と第6航空団の視察に乗り出した。身内の監察なのでどこまでできるか。論文問題ではあきらかに航空幕僚幹部が全国に改めて応募の連絡を発していた。防衛省の隠蔽体質が露骨にでていることである。

11.17.FMラジオ局「WAVE JAM THE WORLD」に出演。この時点で防衛省は講師の名前はわからないと回答。2日後に全容明らかになる。

11.19.：自衛隊の「歴史観・国家観」の講師名がわかる

- | | |
|--------------|--------|
| ①元統幕学校教育課長 | 坂川隆人氏 |
| ②大正大学教授 | 福地 惇氏○ |
| ③日本文化総合研究所代表 | 高森明勅氏○ |
| ④作家 | 井沢元彦氏 |

○印は新しい教科書をつくる会の幹事：「日本の戦争は侵略ではない」侵略戦争美化、憲法敵視

11.20.：防衛庁レクチャー：昨日提出された自衛隊幹部教育の講師名簿について。カリキュラムや講師内定の際の内局の関与等に関して質問する。

11.21.：防衛大臣：自衛隊幹部教育は不適切、見直しを検討したい。

11.24. : 時事通信いわく「防衛省は 24 日までに、統合幕僚学校で一佐、二佐の幹部自衛官を対象の「歴史観・国家観」について廃止を含め見直しに着手、根本的な見直しが必要、講義・講師の見直しが必要と認めた。」

11.21.HTB 朝まで TV : 田母神問題で ; 平沢 (自) 浅尾 (民) 辻元 (社) 井上 (共) 姜尚中 (評論家) 田岡俊記 (軍事評論家) 森本敏 (拓殖大学教授) 西尾幹二 (評論家) 花岡仲昭 (評論家) 水島聡 (元自衛官シンガーソングライター) 田母神擁護派は国際紛争を戦争で解決するという 19 世紀的な考えに戻っているようだ。

12.7. : 田母神問題を中心に国会報告。三週にわたり外交防衛委員会が開かれていない。

12.8. : 緊急シンポジウム「田母神前空幕長問題」のパネリストとして「おそるべき幹部教育の実態と政治の責任」と題し発言

12.9. : NHK 「クローズアップ現代」で田母神問題が放映される (別記)

12.11. : 外交防衛委員会が一ヶ月ぶりで開かれる。午後 2 時から 15 分質疑 ; 田母神氏は統合幕僚長のとき (04 年) 研修団長として中国を訪問し、中国統幕僚 NO.2 と会談の場で、日本軍は悪いことをしていない、と発言した事実について質問した。事実は公電で政府に伝えられたが、政府の対応はなかった。○政府見解を重要組織の代表が否定した○そのような人物を任命した責任が取られていない○この講義を廃止すべきだ (井上発言) 防衛省 ; 廃止を含め廃止する

「歴史観・国家観」の講義の廃止を求めた、浜田防衛相は廃止を含め検討すると回答。テロ新法は多数で否決された。

12.16.総合幕僚学校 校長陸・海・空の三自衛隊幹部学校それぞれの校長から幹部の歴史の教育の概要を POWER POINT で説明を受ける ; 幕僚長もまじり一問一答。

歴史観・国家観は統幕長 : 偏向をみとめる。現場の教官は偏向を認めない。侵略戦争正当化についての問題点は必ずしも自衛隊全体のものになっていなかった。

PM1:40 からの情報 ; 空自浜松基地の第 2 課学校では田母神の方針で A 級戦犯の廟を訪問するこ

とを使命教育として予定している。

田母神氏 : 戦後の軍隊、戦後の自衛隊と連続したものにとらえ、海自舞鶴基地、陸自久居駐在所の場合を指摘、侵略戦争正当化の教育の隊内への影響の全面解明を強く求めた

12.18. : 最後の外交防衛委員会の質疑 : 懸賞論文の集団応募により、政府見解を否定する意見の組織化を図ったのではないかと質問した。

12.20. : 京都で「田母神前空幕長の侵略美化問題を究明する」学習会を行った。京都憲法会議・自由法曹団・京都平和委員会・安保廃棄京都実行委員会など五団体の共催である。

井上 : 自衛隊の恐るべき幹部教育、その実態と政府の責任を追及した問題を講義。田母神氏の言動の狙いは、自衛隊の専守防衛を打ち破って海外派兵をするとき、旧日本軍と自衛隊を連続したものと見なし、旧軍隊による侵略戦争を美化することで、「海外派兵化」していること「正当化」し、士気を高揚させることを狙っている。舞鶴の橋本氏 : 舞鶴には旧日本軍と同じ名前の艦艇があり、いつのまにかパンフレットのなかで、旧軍時代に同じ名前の艦艇が上げた戦果をほこるような記述があることを知って警告したが、自衛隊全体に拡大していくのではないかと

以上 2008 年 10 月末から同年 12 月末尾までのブログを逐って見たのだが、防衛省側の隠蔽体

質がはっきりと推測できた。同議員の努力もあって次第に本質があきらかになっていったが、彼を空幕長に任命し、独自の「歴史



田母神俊雄

自らの身は
顧みず

2008年12月刊行の
最新書

観・国家観」講座を設けさせた背後の勢力が如何なるものか、我々は注意を怠ってはいけないと思う。かつての1936年2.26事件は一部将校の決起によるものであるとされた。処刑されたのは若手決起将校に限られたが、それ以来軍部の勢力が伸張し、対中戦争、太平洋戦争の遠からず。任命された当時の首相・防衛相・次官の顔ぶれを見ても当時如何なる意図が彼をめぐる人事にあったかを私たちは注目しなければならない。

Ⅲ：田母神氏がいかなる時代に成長し、今日みられる思想的根拠をさぐり、それをささえる権力的基盤と支持機構をさぐり、根本的に憲法九条に沿った自衛隊は如何にあるべきかを考える。

①九条の会全国交流会での発言

奥平康弘氏 田母神論文問題ですが、これは論文に値しない、一つひとつが批判の余地のあるトピックスを断定的に撒き散らしている。その一つひとつは、他愛のないものなのに、それが懸賞論文の第一位になる、その政治的背景、雰囲気大きな問題としてあるに違いないと思います。

ですから多極的な側面をもった政治問題になるはずであるとして、マスメディアは格好の話題にしてしまう。いってみれば政治家やマスメディアははしゃいでいる。

その中で麻生さんは、「現役の空幕長が政府見解とは異なる見解を公開したのは極めて不適切であった」と言ってみせた。浜田防衛大臣は「チェックできなかったのはわれわれのミスである」と認めた。政府筋は、「自衛隊員の監督、教育の

あり方、部外への意見発表の届け出など万全を期し、問題の再発防止に努める」と約束しました。

ただ再来年施行される改憲手続法との関係で、法改定のための国民投票の運動の際、公務員・教員の運動を規制することと結びつけて検討していくことは課題となる。

澤地久枝氏 田母神という人は航空幕僚長という非常に高い地位にありながら、いかがわしい団体の募集に応じて「日本が侵略国家というのは濡れ衣」と書いて問題になった。そしてこの論文の審査委員長は私とまるで立場の違う渡部昇一さんです。

それだけではなく、自分の部下を大勢応募させたし、自衛隊の中で非常にゆがんだ歴史観を教えていることが明らかになりました。講師の中には、櫻井よしこさんなど、私たちが平和国家として生きようと言えば反対の方向から攻撃をかけてくる人もいます。そういう教育の中で、自衛隊が戦争のできる集団になろうとしている。この幕僚長をなぜ首相は懲戒免職にしないのか。

しかし、私たちが代われれば世の中は変わる。そして私たちは、9条を守る運動を広げてきました。最近地方などに行って感じることは、大学生、中高生、小学生からもっと小さなお子さんまでみえている。全国の九条の会に参加した人数は確実に増えたし、質的にも広がってきた。

いま考えたいのは、自分たちがどう生きていくかというだけではなく、次の世代、その次の世代にどういふ社会を残すかということ。参加者が重層的になってきたこと、これはやたらなことでは崩されないし、崩させてもなりません。

さしあたっては、経済不況でくらしの問題が迫っています。9条と25条を一つのものとして立ち向かっていく時だと思います。

鶴見俊輔氏 同じ「戦後」といっても国会議員や大臣がもっている「戦後」のイメージは違う。

「戦後」について、あの人たちが持っているイメージは、朝鮮戦争を杖として経済復興した日本、そしてもう一度世界の大国になろうという

意欲が盛り上がった日本だと思います。オリンピックのあたりでそれは非常にはっきりとします。こう変わったのが「戦後」だと思っている。その前あった原爆の投下や、大都会へのじゅうたん爆撃があった時の日本人の感情から出発することができなくなっている。

田母神論文などは、まさにそれを踏まえて、朝鮮戦争以後の復興の空気を通して、戦前の日本にまったく無反省に帰っていく道を開いている。しかし「戦後」とは戦争が終わった時という意味なのです。その時の我々の気分はどうなのか。偶然「二重被爆」という資料を手に入れたのですが、4人の人たちの話が残っています。その中の一人が「もてあそばれたような気がする」と書いていますが、これが戦争が終わったときの原点なんです。

アメリカは日本にすでに連合艦隊がないこと、また高層部から撮った写真をみて、もう日本が兵器の補充ができないことを知っていたが、原爆投下の決断をした。アメリカの兵隊の生命を助けるためと言っていますが、ウソです。アメリカは二つの原爆をもっていた。長崎についてはその違いを確認したかった。「二度もてあそばれた」という言葉の意味だと思います。

② NHK クローズアップ現代（12月9日放送）から

政府見解と180度見解を異にした発言・論文明るみに出て田母神航空幕僚長が退職。手ごかりは6年前の校長時代の講義に始まる。平成14年空将に任ぜられ、学校長になった。元航空幕僚長の津田義光；内政にたいする不満である。これまでの自衛隊の信用を地に落とすものだ。田母神氏は歴史観・国家観の講座を幕僚長の権限で独自につくり、防衛省からは一切掣肘を受けず、大東亜戦史観・東京裁判など管見するに実に多数の問題となる科目が見え隠れする。

時に平成15～16年頃情勢が大いに変わった。イラク派兵が実現し、インド洋に給油活動が開かれる頃から、田母神は部内誌に次々と持論

を発表していった。「自衛隊はいまやこれまでの屈曲に惑わされず、自信をもって行動すべきだ。その時部下が日本が侵略国家などというまちがった不当な圧迫を受けては思い切った活動ができない」

防衛省の受け止め方が如何にあるか15人の現役自衛官に意見を聴いた。11人は迷いを隠せず、そのような意見を肯定しなかった。防衛省調達局長西川徴美氏は認めなかった。

NHK 石山記者は田母神氏に面会し真意を聴いた；①不安を部下に与えるような事実は活動に差し支えるから言うべきでない。②先輩が悪いことをしたと教えられたら安心して部下が働けない・・・等々の発言であった。

今新たな問題はシビリアンコントロール。日本防衛学会の討議で自衛隊がシビリアンコントロールを遵守しているか否かで論議されている。

初代校長榎智男は、シビリアンコントロールを深く根付かせようとした。第二次大戦の軍部の暴走が310万人の尊い犠牲を輩出した。再び悲劇をくりかえさないようにという意図があった。自衛隊は閉鎖的である。服従する誇り/文民統制に嬉々としてしたがうのが本義である。文民統制に自衛隊は従ってきた。しかし、自衛隊は閉鎖的である。視野を広く行動せよ。

防衛大学一年から四年生まで1,600人在校。現在の校長は五百旗頭真氏（前神戸大学教授。歴史学）。日米外交史なる著書を題材に学生に話しかけている。学生には広い視野を持たせるようにしている。学生は制帽・制服で目つきが鋭く、旧軍隊式の敬礼の姿勢は一般の学生のラフなスタイルからすると大いに差異が認められる。

放送は文民統制を主題にしていたが、一層の真実の追究が必要であると感じた。

イラク支援ボランティア 高遠菜穂子さんに聞く 戦争で殺されていった人たちの声に応えるために



昨年11月、イラク中西部の町・ラマディで復興活動を主宰している青年・カーシム・トゥルキさん（32歳）を日本に招いて、約3週間、沖縄・広島をはじめ、全国各地を回るスピーキングツアーが行われました。カーシムさんと連携して復興支援にとりくむ高遠菜穂子さんが招聘・コーディネートにあたりました。当会は、札幌講演会を後援し、参加を呼びかけました。6年にわたってイラク支援にとりくむ高遠さんにお話を聞きました。

500万人をこえるイラク人難民

現在、国内に250万人、シリアに150万人、ヨルダンに70万人のイラク人難民がいると言われています。その他の国への避難民を加えると500万人を越えます。国外に避難した人は、UNHCR（国連難民高等弁務官）に「難民」と登録されれば、医療など様々なサポートが得られるけれど、登録されるまでにえんえん何ヶ月も待たされる事態です。

結局、医療を必要とする人は全額自費前払いでしか病院にかかれない。完全失業中の難民が高い医療費を払うすべもなく、何の手も施されず亡くなっていった人たちを大勢見てきました。

体も心も傷つけられてしまったイラク人。どうしてここまで痛めつけられなければならないのか。その傷はととてもとても深いのです。私たちがここで歩みを止めるわけにはいきません。

冬を乗り越えるために

イラクもヨルダンも、冬は相当冷え込みます。

ラマディでは、カーシムが古い学校で避難生活をおくっている家庭を回って何が必要か調べてきました。その結果、すきま風が吹く学校の教室での生活は辛いだろうと、学校に住む約3

0家族にストーブと灯油を配ることにしました。ヨルダンでは、避難している子どもたちに冬物コート配るプロジェクトが進行中です(写真)。

みなさんからいただいたカンパは、こうしてイラクの子どもたちを守るために使わせていただいています。ご協力に感謝しています。

死んだ戦友のために

カーシムの左肩にはクラスター爆弾の破片が残っています。名古屋で「無料で摘出してくれる医師がいるんだけど、どうする」という話が出ました。彼は「とりたくない」と断りました。それは「死んだ友人のため」。イラク戦争時、共和国防衛隊の一員であった彼は、米軍の放ったクラスター爆弾から逃れるために塹壕に飛び込んだ時、後ろにいた戦友を爆弾が直撃し、その体を貫通した破片が彼の肩に食い込みました。「彼がいなければ、死んでいたのは私だった」

沖縄伊江島、広島を回って、彼に戦争の音と臭いがよみがえってきていました。彼にとってはとても辛いことです。

日本は”平和”なのか

名古屋と札幌では、多くの高校生、大学生と

直接交流する機会をもつことができました。無邪気に振る舞う日本の若者を見て「うらやましい」とつぶやいていました。

高校生からは「カーシムさんにとっての平和とは」という質問がありました。「僕は平和をほとんど体験していないから、よくわからない」カーシムにとって、生まれてから4歳までの4年間は唯一戦争のなかった時代です。「よくわからないけれど、”戦争をしないこと”そして”戦争に巻き込まれないこと”だ”と思う。日本はすでに”戦争に巻き込まれている”と思う」「日本はイラク戦争の当事者であり、加害者だ」という意識がないのではないか」帰国直前に彼が漏らしていました。

憲法9条を体現する

カーシムは、戦争の中であくまで非暴力を貫いて、武器を持たずに祖国の復興にとり組んでいます。彼こそ、憲法9条を体現していると感じています。彼の家では2年前にすべての銃を

投げてしまったそうです。もし1丁でも銃を持っていたら米軍に踏み込まれた時、「テロリスト」として連行され、帰ってくることはできなかったでしょう。銃を持っていないからこそ、宗派の違う仲間たちと一緒に復興に取り組めるし、平和に暮らすことができるのです。

戦争の話聞く覚悟

私たちが今生きている理由は何だろうと考えます。それは、戦争で殺されてしまった人たちの声、涙を伝えるためではないか。ニュースにもならず、埋葬もされず、野犬に食い尽くされて肉片となってしまった人たちが生きていた証を証言することではないのかと。

戦争の話を知る時は、覚悟が入ります。見たくもない映像を見る時は覚悟が必要です。心で見ないで聴いて、人々に伝える義務があるから。一度聴き、見てしまった以上、後戻りはできないのだと思います。(北海道民医連新聞 1月1日付けより転載)



写真中央が、カーシム・トゥルキさん。

ラマディのホームレス家族の子どもたちに衣服を配っているところです。

高遠さんのもとに寄せられた募金がこうしてイラクの人々のくらしを守るために使われています。

募金は 郵便振替口座番号：02750-3-62668
加入者名：イラク支援ボランティア 高遠菜穂子 へ

札幌市議会で「慰安婦」問題に関する意見書が採択されました

11月7日、政府にたいして、「謝罪」「名誉回復と損害賠償」「学校教育」をもとめる意見書が議長を除く議員66人中、自民党系二会派以外の民主、公明、共産、市民ネット、市政改革クラブの議員全員43人の賛成で、自治体による「慰安婦」問題に関する意見書採択は、宝塚市、東京都清瀬市に続き3例目、政令指定都市でははじめてです。

意見書採択の意義を受け止め、国には一刻も早い実行を求め、札幌市には、市議会の意見書を尊重し市民に広め、歴史を正しく受け継いで未来へつなぐ努力をすることを求めていること、「慰安婦」問題の解決に向けて活動を続けてきた団体／個人を結んでネットワークする「日本軍『慰安婦』問題連絡会・札幌」が結成されました（12月13日）。

当会も趣旨に賛同し、協賛することになりました。以下に意見書全文を紹介します。

「慰安婦」問題に関する意見書

2007年7月30日、アメリカ下院議員は全会一致で、「日本軍が女性を強制的に性奴隷にした」ことを公式に認め、謝罪するよう日本政府に求める決議を採択した。

日本政府に謝罪と賠償、歴史教育などを求める決議案は、アメリカに続き、昨年11月にオランダとカナダで、12月13日にはEU議会で採択されている。また、今年3月にはフィリピン議会下院外交委員会も2005年に続く2度目の決議を採択している他、国連やILOなどの国際的な人権擁護機構からも繰り返し、勧告、指摘を受けている。

しかしながら日本政府は、これらの決議採択を受けても、公式な謝罪をしていない。これは、1993年の河野洋平官房長官の談話と矛盾する態度である。

日本政府が、「慰安婦」の被害にあった女性たちに対して、いまだに公式の謝罪もせず、補償もせず、真相究明をしないばかりか、教科書からもその記述を消し去ろうとしていることに対して、世界各国で批判の声が高まっている。

よって、国会及び政府においては、1993年の河野洋平官房長官の談話に基づき、「慰安婦」問題の真相究明を行い、被害者の尊厳回復に努め、下記の事項のとおり、誠実な対応をされるよう強く要望する。

記

- 1 政府は、「慰安婦」被害の事実を確認し、被害者に対し閣議決定による謝罪を行うこと。
- 2 政府は、「慰安婦」問題解決のための法律をつくり、被害者の名誉回復と損害賠償を行うこと。
- 3 学校や社会の教育において「慰安婦」問題の歴史を教え、国民が歴史を継承できるようにすること。

以上、地方自治法第99条の規定により、意見書を提出する。

平成20年（2008年）11月7日

札幌市議会

■ 会員のみなさまへ ■

第3回総会・記念講演会のご案内

2009年2月14日（土）午後3時から 札幌テレビ塔2Fホール

「沖縄という窓から見える『九条の現在』」（仮題）

琉球新報記者 松元 剛 さん

1965年生まれ 現在経済部副部長。9年間「基地」担当として、連載「軍事基地と住民」（02年）で新聞労連ジャーナリスト賞、「不平等の源流（日米地位協定を扱った）」で日本ジャーナリスト会議賞大賞を受賞されています。著書に、「ルポ軍事基地とたたかう住民たち」（NHK出版）「検証 地位協定」（高文研）などがあります。

現在、雑誌「世界」に「リレーコラム 沖縄（シマ）という窓」を連載中（隔月）です。

ブックレット

加藤周一が語る

聞き手 小森 陽一

（一冊 300円）

逝去される直前（08年11月）に発行された
生前最後の作品です。

当会事務局で扱っていますので、ご注文下さい。



イベントのご紹介・・・当会にご案内をいただいた講演会をご紹介します・・・

- 札幌弁護士会－憲法市民講座－ 「現代日本の貧困と格差を考える」
- 井原勝介前岩国市長講演&上映会 「平和への道 ～基地と軍隊のないまちをめざして～」
井原さんが、全道6都市をまわります。 *詳しくは、別紙のチラシをご覧ください。*

2008年度 共同代表

黒川 一郎	札幌医大名誉教授	安田 慶秀	北大名誉教授
三上 一成	三上整形外科医院院長	薄井 正道	東北北海道病院院長
中井 秀紀	前北海道民医連会長	菅野 保	菅野歯科医院院長
能條多恵子	前富良野看護専門学校校長	落合 裕昭	元北海道作業療法士会副会長
越田 靖夫	元北海道臨床検査技師会副会長		
<幹事長>	猫塚 義夫 勤医協札幌病院		

事務局 〒001-0014 札幌市北区北14西3 1-12
電話 (011) 758-4585 FAX (011) 716-3927
<http://iryo9jyo.dosanko.org/> 9jyo@dominiren.gr.jp